

2014年の主要水産物の需要と供給

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量								価 格						
	生 産	産地	食用 加工	輸 入	輸 出	東 京	缶 びん詰	在 庫	生産額 (億円)	産地	輸入 (億円)	輸出 (億円)	東 京	魚介類消費 支出1世帯	為替 レート
25	4,791	1,650	1,390	2,473	552	514	112	862	14,395	170	15,756	2,216	872	78,739	97.60
26	4,789	1,683		2,527	471	479		860		174	16,496	2,336	964	79,829	105.94
%	100	102	0	102	85	93	0	100		103	105	105	111	101	108.55

数 量

本年の国内生産量は、479万トンと前年とほぼ同水準であった。

全体的な特徴としては、資源が上向きのサバ類、年明け後の三陸沖で好漁がみられアカイカ（冷）、再度好漁となったサンマ等が生産を伸ばした。

大きく増加した魚種は、上記サバ類、アカイカ（冷）、サンマの他、冷凍マグロ、冷凍キハダ等であった。一方大きく減少した魚種は、冷凍ビンナガ、キハダ、マカジキ、カツオ、マイワシ、ウルメ、ムロアジ、冷凍スルメイカ、ホッケ等であった。

輸入は、為替円安もあったが、253万トンと前年を若干上回った。

本年は、目立って多くなったのは引き続きタラ、アジ、サバ、カツオ、すり身、キハダ、タラコ原卵等で様々な魚種のフィレーも増加、餌不足が顕著であったミール等であった。目立って減少したのはビンナガ、サケ・マス、サワラ、メロ、赤魚、エビ類、モンゴイカ、タコ等であり、その他の魚種は概ね横ばい圏の動きであった。

近年増加基調が続いていた輸出は、本年は47万トンで為替円安が進行したものの単価高も反映してか想定以上に伸びず前年（55万トン）を下回った。

目立って増加したものは、国内生産が減産したものの世界的に需要が伸びたサケ類を始め、活マダイ、震災から生産が回復しつつあるホヤ、カニ類、練製品を始めとした調整品位であった。目立って減少したものは、イワシを始めヒラメ・カレイ類、キハダ、カツオ、タラ、サンマ、イカ類等であるが、全体的に減少した魚種が多かった。

東京の入荷量は、47.9万トンで前年（51.4万トン）をやや下回ったが、冷凍魚の減少が大きく反映している。

月平均在庫量は、86万トンでほぼ前年（86.2万トン）並みであった。

価 格 ・ 金 額

本年の産地価格の特徴は、燃油の高値推移、サケに象徴される輸入魚（為替も含め）の高値等の影響もあって生産量がほぼ横ばいであったが、引続き堅調な市況が続いたことであった。

東京消費地価格は、964円で国内物、輸入物の高値を反映し引続き前年（872円）をやや上回った。

輸入金額は、1兆6496億円（前年：1兆5756億円）で前年を740億円上回った。

輸出金額は、2216億円で引続き前年（2216億円）を120億円上回った。

円 レ ー ト

26年の円レート（対USドル）は、年平均105.9円で前年（97.6円）を上回る円安展開となった。

円レートは、1985年の9月のプラザ合意以降一時的な円安がみられたものの急速な円高・ドル安傾向が10年間続いた。

しかし、1995年秋から円安に転じ、1997年以降に証券会社、銀行の倒産が続き金融システム不安等も重なり一層円安が進行し、1998年も一時140円台の安値を記録するなど秋口まで円安が進行した。その後、一時年末にかけて円高（113円）へと反騰したが、1999年は夏場までやや円安（114～121円）で推移したが、下半期には急激に円高に反騰し、12月は103円まで急騰した。2000年は年末の円高の103円からスタートで、一時的な円高はあったが、基本的には円安傾向で推移し、年末には111円まで下げた。2001年は長引く不況や銀行、ゼネコン、流通分野での倒産、再編もあり、年を跨いで急激な円安が進行し、9、10月に119円とやや円高に戻したものの、12月には124円と円安に急落した。2002年には131円の円安から始まってその後円高に転じ、8月に118円まで上昇したが、一向に景況感の低迷もあり12月には122円まで下げた。その結果、為替は10年前の水準まで戻した。2003年は年初の119円から始まり9月までは2円前後の幅での小さな動きであったが、10月に111円と急騰し、11、12月と小幅円高で推移し108円まで上げた。2004年は年初106円の円高で始まり、5月に112円の円安に振れたが、その後は円高に転じ11月以降は104円、103円まで上げた。2005年は年初の103円から下半期には円安に変わり7月には110円まで下げ、その後一貫して円安で推移し、12月には119円まで下げ、年末には若干円高となり117円台で推移した。2006年、年初は引続き円高の116円でその後も117円とやや円安で推移していたが、5月に112円と円高に振れたが、それ以降は11月の119円までじり安推移し、11、12月と若干の円高に戻した。2007年は年末以上に円安の121円に始まり、6月には123円まで円安が進行した。しかし米国のサブプライムローン等の影響もあって、7月以降は円高に振れ、11月には110円まで進み、12月には112円にやや円安となったが、基本的には下半期は円高基調になった。

2008年は、年初から円高となり、3月100円まで円高が進んだその後は8月まで円安に振れたが、9月のリーマンショック以降の世界金融危機の拡がりの中で円は急騰し、12月には91円まで上げた。2009年は90円の円高から始まり、4月には99円の円安となり、その後は円高となり、11月には90円を割り、12月には一時84円台を記録するなど、円高が進行した。

2010年は当初は91円の円安で始まり、6月まで90-93円の幅で進行したが、下半期に入って87円と90円を割り、その後も円高は10月の82円まで進み、12月の83円とその後若干戻したものの、円高が際立った。2011年は年初83円から始まり6月には81円台まで上昇した。下半期に入るとギリシャの金融危機からEU全体の金融不安が広がり、相対的に信用がある円が買われ、9、10月は77円台まで円高が一層進んだ。その後78円まで戻したが、下半期の円高は際立っていた。2012年は、年末からの円高が一層進み、76円台まで進んだ。その後はギリシャの民間債務減免もあって、一時的な危機回避策でユーロも値を戻し、円安に振れ3月には82円台まで進行した。その後ギリシャの政治の不安定性もあって再度円高に振れる動きが顕著になり9月の78円台後半まで進んだ。しかしその後は、日本国内で総選挙を巡る攻防の中で自民党有利とのメディアの発信の中で12月総選挙の圧勝もあり自民党が政権奪取に成功した。

選挙期間中のその経済政策の中で為替問題にも言及したこともあり、10月以降円安に振れ12月には83円台まで円安が進んだ。2013年は年初から円安が進み89円の円安から始まり、2月93円、3月95円、4月98円、5月101円と円安が進んだが、一時6月、8月に97円、98円と円高に振れたが、その後7月100円、9月99円、10月98円、11月100円、12月103円となり安部新政権と日銀の金融緩和政策の中で円安が進んだ。2014年は、上半期は102円前後で比較的落ち着いた展開であったが、9月に107円に一気に円安が進み、10月の追加の金融緩和策を決めたことと、年内の総選挙気運の高まりと政府自民党の圧勝ムードの中で、11月には116円と1月で8円の円安を記録するなど年末まで円安（12月：119円）が進んだ。

（参考：1984年237円→1985年240円→1986年170円→1987年146円→1988年128円→1989年137円→1990年145円→1991年135円→1992年127円→1993年112円→1994年102円→1995年94円→1996年108円→1997年121円→1998年131円→1999年114円→2000年107円→2001年121円→2002年126円→2003年116円→2004年108円→2005年110円→2006年116円→2007年118円→2008年103円→2009年94円→2010年88円→2011年81円→2012年80円→2013年98円→2014年106円）

石油価格（1kl当たり）

26年のA重油価格は、年初は年末より一段上げ90,000円の高値で始まったが、2月上旬に88,000円、3月上旬87,000円、4月上旬86,000円、中旬85,000円とジリ安で推移し、5月下旬86,000円、87,000円と反騰した。そして6月下旬には89,000円に上昇した。しかし7月に入り再度弱くなり中旬88,000円に下げた。その後8月上旬89,000円に上げたが、9月上旬85,000円と再度下げに転じ、9月中旬83,000円、10月中旬82,000円、80,000円、下旬78,000円まで下げた。再度11月上旬には79,000円に上げたが、直ぐの11月下旬78,000円とやや下げ、12月上旬に75,000円まで下げ年末まで続いた。本年は、上半期高値、下半期安値となったが、周年でみると高値基調は続いた。

参考：近年の最高値74,000円/k1（1982年11月）75,000円/k1（2007年12月）、115,000円（2008年7月）、91,000円（2013年10月）